

## E 26 家事サービス利用の実態とその動向（第3報）

— 属性別に見た主婦の生活意識 —

福島大教育 ○壁谷沢万里子 桜の聖母短大 長沢由喜子

目的 第1報<sup>1)</sup>、第2報<sup>2)</sup>と同じく、最近増加しつつある家事サービス利用の実態に着目し、それに関連する要因を主婦の消費行動の調査により把握し、今後の生活様式形成を予測する手がかりを得ようとするものである。第3報では既報の結果から家事サービス利用に強い関連をもつと考えられた生活意識を主婦の属性から分析し、第4報では生活意識と利用実態との関連を検討する。

方法 福島市内およびその近郊の主婦を対象に1985年5～6月に調査し、得られた標本656について属性と生活意識、利用程度と生活意識とのクロス分析を行った。

結果 主婦の生活意識について概略を述べる。全体の7割が性別分業を認め、手づくり志向が強く、教養や趣味など精神的に満たされる生活を願っており、全般的に地方の特性を反映した保守的主婦像が捉えられた。属性別にみた顕著な傾向は次のとおりである。

(1)年代別では生活規範および家事の自己評価との間に有意性が認められ、中でも40歳代主婦は家事の自己評価が高く積極的傾向がめだっている。(2)職業別では手づくり意識、本人の性別分業観、家事の自己評価、母親の家事实態との間に有意性が認められ、パート・内職群に他と異なる傾向が現われている。(3)学歴別では生活規範、手づくり意識、性別分業観、母親の家事实態、物価高対策との間に差があり、短大卒以上と中卒群との間には明確な生活意識の相違が見られる。

第1報<sup>1)</sup> 一調査の枠組と全般的傾向—

第2報<sup>2)</sup> 一属性別にみた利用実態と今後の動向—

日本家政学会東北・北海道支部第30回総会研究発表要旨(1985.11)